

# OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C	O	N	T	E	N	T	S
患者と医療従事者との「あいだ」	[太田富雄]	—————	—————	—————	—————	—————	2
F A C P	について	[福田市蔵]	—————	—————	—————	—————	3
真のホスピタリティーとは	ナースの優しい笑顔—21世紀の医療環境(5)—	[牧 彰]	—————	—————	—————	—————	4
図書館利用のマナーについて	思うこと	[原田佳奈]	—————	—————	—————	—————	5
OPACのオリエンテーション	を受けて	[赤松こずえ]	—————	—————	—————	—————	5
「歩き方」の「使い方」	[大谷一弘]	—————	—————	—————	—————	—————	6
MEDLINE情報検索での検索結果から	ProQuestの全文データへのリンクについて	—————	—————	—————	—————	—————	7
他大学図書館訪問記(9)	(滋賀医科大学附属図書館の巻)	—————	—————	—————	—————	—————	8
書評「古代壺は語る—シルバー・パーチ壺訓より」	[中川アユミ]	—————	—————	—————	—————	—————	9
近畿地区医学図書館協議会第5回シンポジウム	に参加して	[崔照子]	—————	—————	—————	—————	10
お知らせ	—————	—————	—————	—————	—————	—————	11
本学教職員著作寄贈	—————	—————	—————	—————	—————	—————	11
図書館業務日誌	—————	—————	—————	—————	—————	—————	12
編集後記	—————	—————	—————	—————	—————	—————	12



T.K.

## 患者と医療従事者との「あいだ」

太田 富雄



患者と医療従事者の関係・間柄は、患者がいのちの危機、日常性の喪失を訴え、その回復を願って医師のもとを訪れることから始まる。最近、アメリカでは、この患者と医療従事者の「あいだ」を、「消費者コンシューマと生産者」ないし「依頼人クライアントと弁護士ないしカウンセラー」との関係として認識しようとする傾向がある。もし、医療が純粋な経済行為であると考えるなら、

医療上で起こりえるあらゆる危険性を含めた契約書を交わさなければならないだろう。なぜなら、一人ひとりまったく異なる身体的条件、さらに知性、感性をもった患者を対象に、技術的にも人格的にも完璧でありえようはずのない医療従事者が医療行為を行うのだから、十分な説明を受けた上での同意、「インフォームド・コンセント」では不十分である。最近では、患者の方も十分に検討した上で同意する「valid consent 妥当な同意」が要求される所以である。

このコンシューマとかクライアントとしての患者把握の原点に、「医療」は「サービス業」であるという産業分類があるのかも知れない。治療費を請求する限り医療行為は確かに経済活動の一種ではあるが倫理的要素の強いもので、健康人同士の対等な経済関係ではない。本学の河野教授（衛生学・公衆衛生学）に教えていただいたのだが、産業分類では「医療はサービス業」であるが、職業分類では「医療従事者は専門的・技術的職業従事者」に属するという。いずれにせよわれわれはサービス業に従事しているつもりはない。聖職とまでは言えなくても、使命感をもって人の不幸を取り除き、喜んでもらえる幸せを噛みしめ、誇りをもって努力してきたのに、医療はサービス業だといわれてもピンと来ない。サービス業なるものを蔑視している訳ではないが、医療を一般的にそう認識されているのだろうか。私ひとりがいい気になって医療をしていたのだろうか。

健康に過ごしていた人が病魔に襲われると、平和であるべき日常性はその時点で断絶される。リストラの嵐の吹きすさぶ今日この頃、とくに人生の黄昏時に職場を離脱することはかなりのショックであろう。経済的、身体的、そして精神的トリプルパンチを食らって入院してくる患者を前にして、医療従事者が、それを経済活動の一環として対等な関係を持つことなどできるわけがない。受け持ち患者が重症であるのに、時間が来たからといって当直医に任せて帰るわけにはいかない。要約すれば、医療のみならず教育・宗教関連職種などをまとめて「第三の職種」に分類するべきではなかろうか。これらの職種では純粋な経済関係は成立し難く、コンシューマとかクライアントという発想は不自然である。

患者と医療従事者との特殊な「あいだ」がらとして、もう一つのキー・ワードは「人称的」関係である。外科医が手術的治療を選択する場合、肉親（二人称）なら手術するかどうかを考えるべきだという意見を時に聞くことがあるが、私に言わせれば、それは決して正しいアドバイスではないように思う。肉親にメスを入れることは精神的に信じがたいほどのストレスである。むしろ、患者が見知らぬ人（三人称）であるからこそ冷静な医療行為が可能なのであろう。しかし、主治医としてある期間患者・家族との間につき合いができると、奇妙な関係が成立する。肉親でもないが赤の他人でもない、人称的には「空白」地帯である。これがいわゆる「感情移入」ということによって発生してくるのだろうが、この患者と主治医の人称的関係を、私は「二人称半」的關係と呼んでいる。このことはわれわれの脳死患者が移植医療との関係で論じられる場合に極めて明瞭となる。私は常に言うことにしている。「われわれは脳死患者の主治医である」と。

以上、患者と医療従事者の「あいだ」は、一筋縄では行かないことを職員の皆さん、および一般の人々にもアピールしたい。

(おた・とみお 脳神経外科学教授)

## F A C P について

福 田 市 蔵

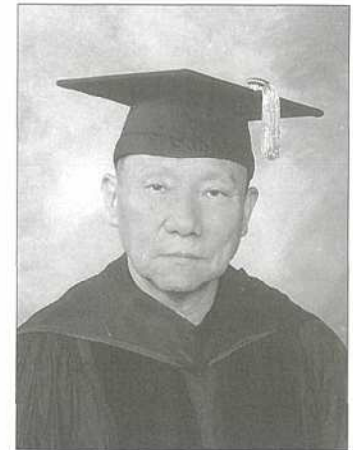
Fellow of American College of Physicians (F A C P) は、1997年度には本邦で33名を数えており、米国内科学会特別会員制度で、推薦を受けた会員の履歴、業績を基に審査決定され、この称号を得る事は学会における評価と名誉を意味する。特に日本人の審査決定には、日本内科学会総会会長の推薦が必要である。本稿では F A C P に就て論述する。

American College of Physicians (A C P) : 1916年に最初の総会が持たれたが、翌年に組織化されている。A C P は1917年より組織され、1924年には Master of American College of Physicians (M A C P) が総会で承任されている。1929年の総会で John Phillips memorial award が確定され、Honorary Fellowship は、1950年の総会で確立された。Fellow of Royal College of Physicians (F R C P) のある doctor 達は、同時に F A C P が送られている。

A C P の使命は、(1)正常、病態条件下の内科学に関わる生命科学を奨励発展させること、(2)内科専門医の高度の教育の持続を奨励し、関与させること、(3)内科学の臨床研究、治療、基礎的研究のための教育による公衆衛生、福祉の増進に集約される。更に政府担当部門、専門機関への施策助言、施策策定完成のための標準規定に携る内科専門職に対する審査、審査機関への施策助言を行うと共に、基礎的な物の見方になれた臨床内科専門医の役割とその貢献を理解せしめるにある。

Membership criteria : American College of Physicians は、fellow (F A C P)、fellow emeritus (F A C P)、associate fellow、member、affiliate-in-training (student member とは別である)、student-member に区分される。F A C P の文字の使用は、fellow、fellow emeritus、distinguished fellow、honorary fellow に限り名前の後に記載できる。F A C P 選出者は、college の年次総会期間中の特定された一日夕刻に開催される“convocation of college”に召集され、その場で F A C P 免許が交付される。fellow、distinguished fellow のみが college の特権を行使し、選挙権、office を保持することが認められている。

Fellow (F A C P) : fellow の名称 (F A C P) は、内科学の高度知識習熟、術式習得を完成達成したことを college が認知した者のみが使用し得る。



Fellow 候補者は American Board of Medical Specialties (A B M S) の membership 保持者か Advisory Board for Osteopathic specialty board と subspecialty board の双方を正式に証明された者のみに与えられる。地域社会で認知された内科専門医、consultant ないし scientist として承認されている証明が必要である。また、審査委員会による審査時点で最小限2年間の subspecialty training を満たし、理事会監督下の試験に合格するか、理事会が指名した特別委員会監督下の試験に合格する事が必要である。また同時に、長期間に亘る内科領域で教授、研究者、内科専門医として活躍し、文献上著明な貢献をした証明が必要である。

米国以外の定住 fellow : 北米以外に定住する候補者は、A B M S、A B O S の両者の membership を保持し、specialty、subspecialty board を米国で完了し、本国で優秀な多数の業績があり、且つ内科専門医資格をもつ者に限定される。日本内科学会総会会長の推薦状が必要である。大学病院の教授、内科責任者として活躍し、major peer reviewed journal に30編以上の投稿掲載論文を所有し、国際会議指導能力をもつ貢献者に限定される。

Member : Member 候補者は、A B M S の membership 保持者か A B O S の membership 保持者で subspecialty 受験資格のある正規の内科学 training を研修終了した者に与えられる。日本内科学会認定内科専門医資格が必要である。

おわりに

以上 Fellow of American College of Physicians (F A C P) の概要に就て觸れたが、国際化が叫ばれている今日、F A C P と同時に F A C C、F I C A、F C C P、F A C G、F A C E、F A S N の一つを保持する必要に迫られている事実を十分に認識する必要がある。因みに1997年度の M A C P 1名、honorary F A C P 8名、F A C P 24名である。(ふくだ・いちぞう 第1内科学診療教授)

## 真のホスピタリティとはナースの優しい笑顔—21世紀の医療環境（5）—

牧 彰



自然の光と緑に満ちあふれた明るくて心地よい病棟廊下

と、一瞬、呆気にとられている私を尻目に、一陣の爽やかな風のようにスカートを翻して乗り去りました。新病院のナースでしょうか。暫くは幸せでした。竣工までの労苦が瞬時にして拭われ、建設に携わって来た喜びがじんわりと胸中に湧き上がり、心身共に新たな活力に満たされました。

病棟は、近年の建築技術によりめまぐるしく変遷して来ました。蛍光灯の発明と空調設備の進歩により、今では無窓のナースステーションや廊下が普通であり、建築基準法に基づく居室の自然採光はもはや有名無実です。病棟の設計は ナースステーションと廊下の工夫にあり、ナースステーションは看護と管理の両面から検討されます。エレベーターホール前は、看護動線が長くなりナースの負担増です。病室の中心では案内の悪い設計になります。暗くて長い廊下や無窓のナースステーションは、例え看護動線を短縮出来てもアメニティの向上にはなりません。廊下は患者と医療従事者の心を通わすコミュニケーションの場であり、言わば病院というコミュニティの街路です。総室の4床室化や個室率の増加により、看護動線は益々長くなりつつあります。建築技術の進歩や病室の充実がナースの職場環境を悪化し、その被害者はナース自身であり、患者でもあるのです。せめて、欧米並の看護単位か、ナースの増員が出来れば問題は解決ですが、日本の医療事情では時期尚早でしょう。地球規模のコミュニケーションをコンセプトとする新世紀を目前にして、ナースが笑顔絶やせずに働ける医療環境が、今こそ切に望まれます。

病棟のアメニティの向上とは、暗くて遠い廊下を無くすことです。赤穂市民病院には、もはや在来の廊下のイメージはありません。看護単位は一辺が20メートルの正方形のループ状通路の外側に病室を、内側にナースステーションを核とした共用室を配置しました。この通路のコーナー部には、対角線の位置にライトコートを2箇所設けて自然を内部に取り込みました。自然は過密と騒音とに疲れた現代人の乾いた心に潤いと真の安らぎを与え、[人間もまた自然の分身である] ことを新たに自覚させてくれます。自然光により開放的で十分明るいこの通路とナースステーションにより、最近の病院にないアメニティ豊かな病棟になりました。ナースステーションからは作業スペース等の共用室を経由して各病室に行けるため、看護動線もかなり短縮されました。サービスカウンターはエレベーターホール側にあり、管理面でも万全です。十分広い通路は、インフォメーションボードや絵画のあるギャラリーとなり、ループ状のためリハビリテーションの訓練にも有効です。

病院のホスピタリティは、ハード（施設）ではなくソフト（心）にあります。医療従事者の暖かい眼差しであり、心の籠った励ましの言葉なのです。施設の設計者の役割は、ナースはもとより全ての医療従事者が、笑顔絶やせずに気持ち良く働ける医療環境を創ることです。開院後ほぼ2年になりますが、新病院が市民の皆様には快く歓迎されているのを見て、設計者としての使命は何とか果たせたものとまずは安堵しています。

（まき・あきら 元日建設計社員 本学総合研究棟・本部図書館棟設計担当）

## 図書館利用のマナーについて思うこと

原田 佳奈

他人に迷惑を掛けないことを公德心と習ったことがあります。この機会に改めて辞書を調べてみると公德心とは「社会、公共の道徳を守る態度」と説明してありました。

私たちが社会で生活していく上で、まず心掛けなければならないことは、他人に迷惑をかけないこととあります。しかし、近頃は公共の場である駅や道路にゴミや空き缶、タバコの吸い殻のポイ捨てや自転車の放置などとてもよく目につきます。“他人の目がないから”“人がやっているから自分もやる”“注意する人がいないからやる”と周囲の迷惑を考えず自己中心的な人が増えてきています。

ところで、本校の図書委員会での問題のひとつに図書館利用のマナーについてよく報告されます。例えば図書館内での話し声や携帯電話の使用です。また、閲覧した本を元の位置に戻していない等です。時には悪質なルール違反も聞きます。図書委員としてはその都度、クラスに伝達し注意を促しています。あたりまえのことですが一人ひとりが心掛けていくことで自分自身も含め、気持ち良く図書館を利用することにつながります。

話しは変わりますが私達は患者中心の看護を行うには「患者さんはいま何を欲しているのだろうか」と常に意識的に自分に問いかけることを忘れないこと。また、「自分がいまこの患者さんだったら」と立場を置き換えて考えてみることもたいせつな心構えと学んでいます。

図書館は自分だけが利用しているのではなく、自分だけがよければよいものではありません。他の利用者のことも考え、他の利用者に迷惑をかけないように私自身、もう一度図書館利用のマナーについて見直していきたいと思います。

(はらだ・かな 第二看護学科1年図書委員)

## OPACのオリエンテーションを受けて

赤松 こずえ

10月18日と19日に、2グループに分かれて司書の方から、OPACのオリエンテーションを受けました。図書館にあるOPACを実際に用いての、オリエンテーションでした。オリエンテーションを受けるまでは、OPACの使用方法についてよく分からない点が多くあったことや、パソコンに不慣れということなど、さまざまな理由からOPACを使って、文献を探すといった機会はありませんでした。

しかし、今回のオリエンテーションでOPACを使用することで、自分の探している文献はもちろんのこと、その文献に関連のある文献も、検索することができるという、利点があることが分かりました。また、図書館の中にある多くの本の中から、容易に自分の必要な文献を探し出すことができると同時により多くの文献を、タイトルや、種類、年代別に探し出せることも分かりました。

このオリエンテーションを受けた後に、実習や、グループワーク等で、文献を検索する機会が何度かあり、有効に活用しています。そして文献検索の時間を短縮するなど、OPACの便利さを実感することができました。

今後も、OPACを使用する機会がさらに増えると思います。講義でも情報科学が始まり、コンピュータの使用方法を学ぶことで、そのあつかに慣れると思います。OPACをスムーズに使用できるよう、たびたび利用し更に学習に役立てていきたいと考えています。

(あかまつ・こずえ 第二看護学科1年図書委員)

## 「歩き方」の「使い方」

大谷 一弘

我が大阪医科大学図書館に「地球の歩き方」という本が約40冊程あるのを御存じだろうか？

地球の歩き方とは、別名「地球の迷い方」ともいわれる旅行書で、個人旅行者向けに、世界中の国々をどう歩くか紹介した本である。だから、一度手にとってしてみるが、あーなるほどと行ってまた戻ってしまうような、聞いたこともあるけどどこにあるか今一つピンと来ない国もある。その中に、中東というセクションがあるが、この夏休みを利用して、私はそこに赴いた。

中東と一口でいってもなかなか広く、イランやイラクなどもそこに入る。初め私は、シルクロードを伝ってイランを通過し、ローマまで達する予定であった。しかし、一ヶ月という短い期間ではそれも難しい。だから、格安航空券が手に入りやすい、イスタンブール（トルコ）へまず入り、南下して行ってシリア、レバノンまで行き、行けたらイスラエル、カイロまで到達しようと決めた。

歩き方は、書いてあることよりもそこからにじみ出る訪問者の気持ちを読みとらなければいけない書物で、その内容によってその街を素通りするか、宿泊するか決めなければいけない。ヨーロッパなどは、書いてあること以下の街であることが多い。はてさて、今回の中身はいかがであろう。

結果的にはイスラム圏を縦断することになったわけだが、中東は本当に素敵だ！ということだ。人々は優しく、物価も安く、とっても安全で夜1：00頃まで一人でうろうろしても大丈夫だ。

食べ物もとてもうまく、量も豊富で安い。南下するにつれて食のパラエティーも減り、果物の種類が減る。だが、減るに従い甘い物屋が充実してきて、アラブ菓子と呼ばれるものをキロ単位で買っていくおばさんや、食っている男性たちなどすごく甘い物屋は繁盛していて、店数も多い。

それと並んで、果物ジュース屋も多く、トルコで日食を見てから下痢になった私は、毎晩ジューススタンドでミックスジュースを飲んで晩メシ代わりにしていた。

その私が言うのだから間違いはないが、エジプトのマンゴジュース、これは格別である。果肉が入って冷えたこいつは、緯度が下がるにつれて逆になる気温と、乾燥した大地によって奪われた私の体力を元どおりにしてくれる。

トルコ、エジプト、イスラエルは人も多く、西洋資本が入っていることから、産業が発達している

ことが容易に想像できるが、シリア、レバノンなど乾燥していて、油もとれず、何の産業もなさそうな国なのに、なんであんなにも人々の心に余裕があったのか分からない。

私たち旅行者からぼろろという気は全くなく、道を聞いても、連れていってくれたりとか、それが分からない場合はわかる人がいるまで人を当たってくれる。暑くて、乾燥していて、雨もそんなに降りそうもないのに、市場の物の多さから考えると、オアシスのようなところで農業が発達しているのかもしれない。

また、人々があんな暑さにもめげずに良く働き、とてもきれい好きなのも驚きでとても勤勉である。メシ屋などに行っても、暇さえあれば、そこかしこを拭いたりしている。

歩き方を読んでも分にはそこまで読みとることはできなかったが、行こうかどうか迷っている人があればぜひともお奨めしたい。一度いってみればわかると思うが、歩き方が書いてる以上に素晴らしい世界が広がっている。

(おおたに・かずひろ 5回生)



ピラミッドと並ぶ

# MEDLINE検索での検索結果からProQuestの全文データへのリンクについて

図書館では文献の全文データを読むことができるProQuestと契約しておりますが、MEDLINEでの文献検索を行った際に、ProQuestに収録されている雑誌へのリンクが表示されるようになっていきます。

MEDLINEで今までのように検索を行い検索結果を表示させた場合、ProQuestに収録されている雑誌にはProQuest Directへのリンクが表示されます。(図1)

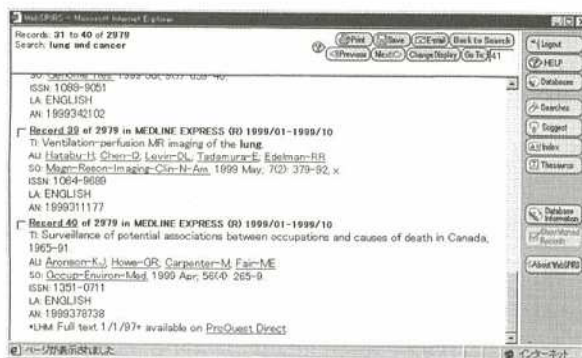
そのリンクをクリックすると、ProQuestの該当雑誌のページが表示されます。(図2)

このページでは、その雑誌の巻号数が表示されていますので、目的の号数をクリックすると各文献の選択画面が開きます。(図3)

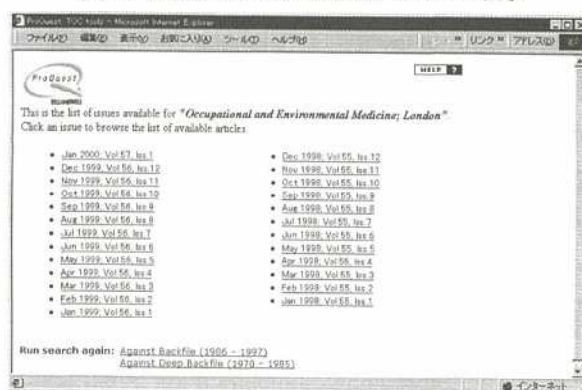
文献は論題のABC順に並んでいます。文献の左側にはその文献で読むことのできる形式が、表示されていますので希望のものをクリックしてください。文献は、テキストのみ・テキストと図表・文献のページイメージの3種類があります。

雑誌によって表示される形式は異なります。ページイメージを表示させるためには、Adobe Acrobat Readerが必要です。(図4)

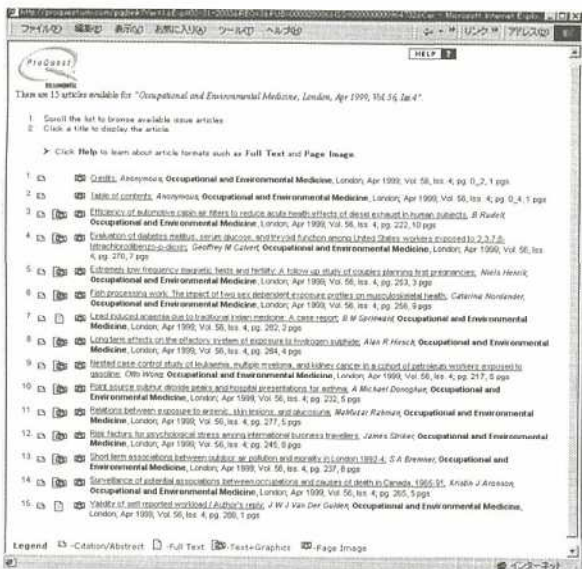
なお、図は学内LAN経由でのWebSPIRS検索のものであります。



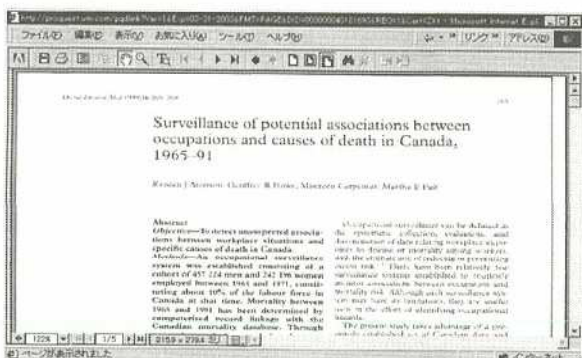
(図1) WebSPIRSでのProQuestへのリンク表示



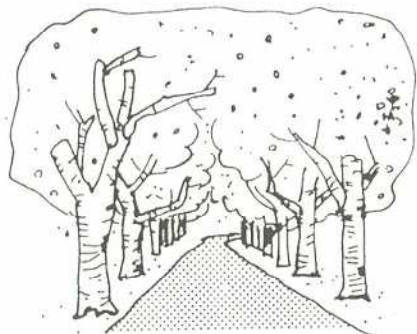
(図2) ProQuestでの雑誌表示



(図3) ProQuestの文献選択画面



(図4) ProQuestでの文献の全文表示



滋賀医科大学附属図書館は、JR東海道線瀬田駅からバスで約10分の県立美術館や高校のある文化ゾーンにあります。

1999年10月に、図書館の増改築およびマルチメディアセンターの新築が行われました。



カウンター (1F)

2つの施設を併せてコラボレーションセンターと称しておられます。

図書館は、地上2階建ての建物です。1階玄関を入ると、入退館システムが設置されています。ゲート手前にブラウジングコーナーがあり、ゲートを入れてすぐにカウンターがあり、ゲート左手にMEDLINE・医学中央雑誌・Current Contentsの検索コーナーがあり、MEDLINE・医学中央雑誌は学内LAN経由でも検索ができます。訪問時には、看護学科の学生向けオリエンテーションが行われていました。1階は、新着雑誌・製本欧文雑誌および参考図書を備え

た閲覧室になっています。医学史資料展示コーナーおよび校費での複写室があります。今回の増築で190㎡の集密書架設置スペースが1階に増えています。2階は、単行書・製本和雑誌等を備えた閲覧室と自由閲覧室および私費での複写室、個席AVコーナーとなっています。

今回新築されたマルチメディアセンターは、図書館と中庭をはさんで隣り合っていて、図書館とは自由に行き来できるようになっています。

各室には、カードリーダーが設置され、個人のカードを読ませることにより入室できるようになっています。時間外には、データを入れ替えることにより入室を管理することができます。

各階のロビーには、パソコンが4台と情報コンセントが備えられ利用に供されています。

1階は、ニューメディア室・ブラウジング室・演習室等が、2階には、サイバーカンファレンス室2室・画像処理室・ブラウジングコーナー・会議室・入出力室等があります。

1階演習室には、76台のWindows端末が設置され、講義等に利用され空いている時間には、自由に入室して利用することができるようになっています。

サイバーカンファレンス室・会議室では、各テーブルに情報コンセントが備えられていて各自がパソコンを接続して、スクリーンに投影して会議等が行えるようにされています。

画像処理室は、3D映像等を作成できるパソコンが設置され、講義資料等を作成するようになっています。



マルチメディアセンターの演習室 (1F)



入出力室も、イメージスキャナ・フィルムスキャナ・X線フィルムディジタイザ・各種プリンタ・プロッタ・ラミネータ等が備えられ、各種資料等の作成に対応できるようになっています。

マルチメディアセンターでは、機器の管理等が大変だと思いますが、専任・兼任のスタッフの方であたられ、部屋の予約・広報等はセンターのホームページから行えるようになっていて、紙の資料は極力使用されないようにされています。

図書館とマルチメディアセンター一体で、情報館のようなインフォメーションナビゲーターとして学外・学内への情報発信の中心として機能していくように、短・長期的展望を持って運営していくことが重要で、利用者にとって魅力あるものをどのように構築していくかを常に情報収集することを怠ってはいけないとのことでした。

また、図書館の開放に関して、現在滋賀県内の医療関係者等には開放されていますが、今後さらに広く開放していく方向で検討されています。

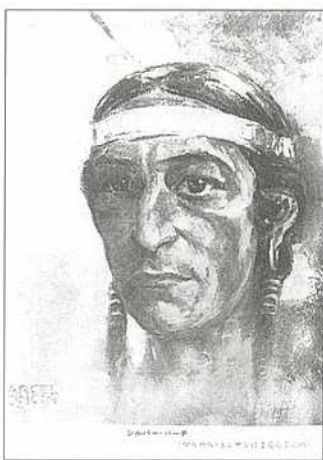
本学でも、これからのマルチメディア教材への対応がますます重要になってくると感じられました。(福広)

## 書評

### 『古代霊は語る―シルバー・バーチ霊訓より』

近藤千雄訳 潮文社 1984年

中川アユミ



「そのうちあなた方も肉体の束縛から解放されて曇りのない目で地上生活を振り返るときがまいります。」目から鱗が落ちるといふのはこのことでしょうか。シルバー・バーチのこの素朴な言葉は、これまでに読んだどのような高邁な靈魂不滅説よりも素直に、肉体的生命とは別の次元の「永遠の生命」の存在を私に納得させてくれました。

世の中に絶対はない、と言われますが、人はいずれ死ぬということだけは絶対確実です。しかし死後の存続の可能性を知れば、哲学的抽象的思考に振り回されなくても、死後のために素直にこの世で魂を磨くことができます。

シルバー・バーチというのは、英国の交霊会で1920年代から半世紀余りにわたり教訓を語り続けた古代霊です。彼の霊訓全11巻のエッセンスを1冊に抄訳したのが本書で、近藤千雄氏のこなれた日本語で非常に読みやすくなっています。本書は、因果律、再生、魂の試練、死後の世界、心霊治療、などの話題を採り上げていますが、靈魂不滅を素直に納得させてくれたのが冒頭の言葉です。

余談になりますが、英国詩人ワーズワスの『靈魂不滅の賦』は私に初めて靈魂不滅について考えるきっかけを与えてくれた詩でした。詩的想像力の衰えを痛感し始めていた彼は、輝かしい前世の記憶に力を見だし、この世での困難を来世を信じることで克服しようとしていました。私も詩人に教えられて靈魂の不滅を信じましたが、人に納得してもらおうとすると困りました。だから今回このシルバー・バーチの霊訓に出会って、一人でも多くの人に生命が永遠であることを知ってもらいたいと思いました。信じる、信じないは自由ですが、不滅の靈魂の存在をただ科学的、物質的に証明できないからと言って、直ちにそれを否定するのは少し軽率であるように思われます。

肉体的な死がすべての終わりならば、この世は余りにも不条理です。しかし霊言は、あなたが肉体の束縛から解放されて地上生活を振り返ったときには「紆余曲折した出来事の絡み合いの中で、その一つ一つがちゃんとした意味をもち、あなたの魂を目覚めさせ、その可能性を引き出す上で意

義があったことを理解するはず」だと教えてくれます。

悩みが尽きないのはこの世の常ですが、シルバー・バーチに言わせれば、それは全て神が魂の試練として我々に与えて下さるものです。苦難を克服しようと努めることこそ生命の大道を永遠に旅する魂のあるべき姿だと教えられると、苦しい毎日も自らの魂の修養であることが理屈抜きに納得できます。シルバー・バーチは、実に易しい言葉でこうしたことを我々に語りかけてくれるのです。

本書の「あとがき」で訳者は「今この全11巻を1冊にまとめて、何という無謀なことをしたのだろうと、恰も過ちを犯してしまった時のような気持ちがふと湧くことがある」と述べています。『霊訓』を抄訳で上梓したのは、訳者が一般読者の反応を懸念したからだそうです。本書が出版されるやいなや、全国から感動の手紙に加えて、霊言集を全訳してほしいという希望がたくさん寄せられたそうです。訳者は、そのような希望を受け取るごとに、霊言の全訳こそ自らの使命だという考えを深め、一年半後に、『シルバー・バーチの霊訓』全訳を総集編1巻を加えた12巻で同じ潮文社から出しました。抄訳で「永遠の生命」に興味を抱かれた方は、全訳版も併せて読まれることをお勧めいたします。なお原書は1938年から1969年までの32年にわたってイギリスのサイキックニュース社から順次出版されました。

(なかがわ・あゆみ 英語講師)

## 近畿地区医学図書館協議会第5回シンポジウムに参加して

崔 照 子

平成11年11月25日、大阪市立大学医学情報センターホールにて近畿地区医学図書館協議会第5回シンポジウムが開催されました。今回のテーマは、『医学図書館の近未来—21世紀の医学図書館サービスをめぐる—』で、約40名の参加がありました。まず、協会理事の本学茂幾課長より開催挨拶があり、次いで4名のパネリストによる講演がありました。パネラーおよび演題は下記の通りです。

### 1. 「研究図書館の戦略とサービスの行方」

大阪市立大学学術情報総合センター 教授 北 克一氏

### 2. 「海外の大学図書館の近未来」

京都大学附属図書館情報サービス課相互利用掛長 鈴木 敬二氏

### 3. 「新しい学術情報の評価・入手ツールの提案」

I S I ジャパンシニアマネージャー 棚橋 佳子氏

### 4. 「今後の学術情報流通システム」

丸善株式会社大阪支店学術情報ナビゲーション営業部  
営業第一グループ(グループ長) 矢次 齊之氏

大学図書館は1990年代後半からインターネットの急激な普及によって、電子図書館サービスが拡大してきました。業務の機械化、学内LANによるOPAC開示及び雑誌をオンラインで提供する電子ジャーナルなどさまざまです。これからも利用者に速く正確に情報を提供するためにサービスは益々細分化されていくものと予想されます。その新しく展開されるであろうサービスを選択し提供していくのが、これからの図書館の課題です。また、今回の参加者の約半数が病院図書室関係者であり、情報が医科大学から病院図書室に拡がりを見せてきている現状を踏まえ、いままで以上に地区のなかでの繋がりも考えていく必要があると確信したシンポジウムでした。

(さい・てるこ さわらぎ分室)



## 平成12年度外国雑誌契約について

平成12年度の外国雑誌契約タイトルについて、図書館運営委員会で検討の結果、本館では、41タイトルを中止、10タイトルを新規に購入、さわらぎ分室では、2タイトルを中止、2タイトルを新規に購入することになりました。今回で3年連続タイトルの中止を行ってきました

ので、平成13年度はタイトルの中止は見合わせる予定です。

以下は中止および新規購入タイトルのリストです。

### 平成12年度外国雑誌中止および新規Title

#### 中止 title (本館)

1. Der anaesthetist
2. Archives of environmental health (P Q D)
3. British medical bulletin
4. Bulletin of environmental contamination and toxicology
5. The Canadian journal of neurological sciences
6. Canadian journal of physiology and pharmacology (P Q D)
7. Cancer immunology & immunotherapy
8. Cardiology clinics
9. The cleft palate-craniofacial journal
10. Ear and hearing
11. Electromyography and clinical neurophysiology
12. Experimental & clinical immunogenetics
13. European surgical research
14. Experimental brain research
15. Gastroenterology clinics of North America
16. Hematology / oncology clinics of North America
17. Histochemistry and cell biology
18. International journal of andrology
19. The journal of comparative neurology
20. The journal of experimental biology
21. The journal of genetic psychology
22. Journal of heart valve disease
23. Journal of medicinal chemistry
24. Journal of neurobiology
25. Journal of reproduction and fertility
26. Journal of theoretical biology
27. Magnetic resonance imaging
28. Magnetic resonance in medicine
29. Medical and biological engineering and computing
30. Medical microbiology and immunology
31. ORL; Journal of oto-rhino-laryngology and its related specialities

32. The otolaryngologic clinics of North America
33. The pain clinic
34. Pancreas
35. Postgraduate medicine
36. Research in microbiology
37. Research in virology
38. The Scandinavian journal of clinical and laboratory investigation
39. Scandinavian journal of urology and nephrology
40. Thrombosis research
41. Topics in pain management

#### 新規 (本館) title

1. Archives of disease in childhood (復活)
2. Cancer gene therapy
3. Carcinogenesis
4. Gene & development
5. Human gene therapy
6. Immunity
7. Journal of the American Society of Nephrology
8. Nature; cell biology
9. Neuroreport
10. Pediatrics (復活)

#### さわらぎ分室

##### 中止 title

1. Alcoholism
2. Biopolymers

##### 変更 title

1. Medical physics 本館へ所蔵換え

##### 新規 title

1. Journal of chemical education
2. Structure

## 本学教職員著作寄贈

勝 健一 (第二内科学)

3次元超音波入門 / 勝 健一 監修 1999

清金公裕 (皮膚科学)

カラーでみる口腔粘膜疾患の診かた / 清金公裕他編 1999

田嶋定夫 (形成外科学)

顔面骨骨折の治療 / 田嶋定夫著 1999

## 図書館業務日誌

- 9月
- 8日(水) 次期図書館システム打ち合わせ会(於、図書館会議室)
- 9日(木) -10日(金) 第17回大学図書館研究集会に館員参加(於、大阪市立大学)
- 13日(月) 新閲覧システム本稼動
- 17日(金) 日本医学図書館協会企画・調査委員会(於、大阪市大医学部分館)
- 24日(金) 医学中央雑誌ユーザ会に館員参加(於、ホテルサンルート梅田)
- 27日(月) 次期図書館システム打ち合わせ会(於、図書館会議室)
- 30日(木) 図書館合同運営委員会(於、図書館会議室)
- 10月
- 1日(金) 新図書館システム本稼動  
医学情報処理センター user 会(於、第二会議室)
- 7日(木) -8日(金) IBM図書館システム研究会に館員参加(於、海外職業訓練協会研修センター)
- 14日(木) 日本医学図書館協会総務会(於、協会中央事務局)
- 15日(金) 平成11年度学術情報センターシンポジウムに館員参加(於、国立京都国際会館)
- 20日(水) 次期図書館システム打ち合わせ会(於、図書館会議室)
- 21日(木) 日本医学図書館協会将来計画委員会(於、国立公衆衛生院)
- 22日(金) 理事会、評議員会(於、野口英世記念会館)
- 30日(土) 本学P A会見学来館
- 11月
- 5日(金) 近畿地区医学図書館協議会例会(於、天理よろず相談所)  
NAC S I S - I R 地区講習会に館員参加(於、立命館大学)
- 12日(金) 次期図書館システム打ち合わせ会(於、図書館会議室)
- 13日(土) 第18期卒業生見学来館
- 25日(木) 近畿地区医学図書館協議会シンポジウム(於、大阪市大医学部)
- 29日(月) 厚生科学特別研究会議(於、国立公衆衛生院)

## 編 集 後 記

今回のトップ記事は、本年3月31日をもって定年退職される太田富雄教授にお願いしました。また、同時に定年退職される、福田市蔵教授にも執筆をお願いしました。「二十一世紀の医療環境」のシリーズは、五回目になります。その他多くの方に執筆していただき、有難うございました。表紙のカットは北村達郎氏にお願いしました。読者の方の投稿を歓迎いたします。(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報／大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.16号 2000年2月15日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社